

●小学生の部

環境大臣賞 荒木 伶王 あらき れおん

今、地球では「温だん化」が進んでいます。初めてそれを聞いた時ぼくは「単に気温が上がるだけ」と思っていました。そう言えば、この夏は、庭の草が茶色く枯れたり、だんご虫が真っ白になってかわいていたな… と思いながら、くわしく調べていくと、それはもっと恐ろしいことなんだ、と気づきました。温だん化が進むと、生態系が壊れる。「あっ、これシンガポールのナイトサファリで聞いた話や！」思わず声が出ました。南極の氷がとけると、そこに住む動物がひ害をうけるだけでなく、水位が上がり、どこかの島がしずみずみます。水害や塩害がおこりやすくなり、異常気象が起こりやすくなります。それが身近に、たびたびに起こるようになると、生き物がほろんでゆきます。一種類ずつ、だんだん。ぼくは、ブルブルとふるえるほど怖くなりました。そしてまた、疑問にもおもいました。

「なぜみんな、こんな大きな問題に気付かないのだろう」

と。そしてお母さんに聞いてみました。すると

「みんな動物が死んでいるだけで、自分には関係ないと、真剣に向きあってないんやろ。気づいてないんちゃうで」と答えました。

「真剣に向き合うって、何なん？」

それは、きちんと目標を立てて、近づいて行くことだと、ぼくは思います。しかし、温だん化は、ぼくらの毎日の生活ではほとんど分かりません。分からないし、見えないものをマシにする、食い止めるにはどうしたらいいんや、とぼくは考えました。みんなが、ゴミをへらしたら、しょうきやくする物がへると二酸化炭素がへる。まずはペットボトルでなく水とうを使えば、ゴミがへる。洗たく物をへらせば、水が汚れない。

「こういうことを、みんなやればいいんや！」

と、ニコニコして話すとお父さんが

「お前、なんにもできてない。口だけや」

と言いました。

「もっとちゃんとせなあかん」とドキッとしました。ぼく一人のことすらきちんとできていないことに気づくと、くやしく、悲しい気持ちでいっぱいになりました。また、みんながしないと変わらないんや、と思った時、そんなことできるんか？ととても不安にもなりました。

動物は「助けて！」とは言えません。でも助けたい。ぼくが、動物を助けたい理由は、動物は人間の仲間だからです。やさしい友達だと思っているからです。熊やイノシシが町の中をウロウロすることが多くなったのは、生態系の変化を示していると思います。身近なところで、それはもう起きているんだとわかりました。世界では毎日、どこかで絶めつしたり、危ぐ種に指定されたりする生き物がいます。このままでは、いつか本当に食料もなくなり、ほろぶことを人間は少しは気付いているのに、みんなが本気にならない。そのことにも、ぼくにも腹が立ちました。

くやしいけれど、みんながいっぺんに変わる方法が、まだ見つかりません。お母さんと何度も何度も、話し合いましたが、見つかりません。学校で校則にしてもらったらいいか？ いや、みんなあんまり校則守ってない。大統領に手紙書いてたのめばいいんか？ いや、ぼくのことなんか知らんし。

でもぼくには、一つ計画があります。それは動物の絵を描き続けることです。ぼくは絵が大好きです。絵で動物のかわいらしさや、大切さ、命をむだにしない生き方を伝えていきたいです。このままだと、人間と動物と一緒に生きていくことができる地球はもうなくなるかも知れないです。そんなことを起こさないためにも、一日でも早くみんながこの問題を自分のこととして、くらし始めて欲しいと伝えたいです。だから「動物さん、待っててね。ぼく、必ずきみたちを助けるからね」